過疎農山村地域に暮らす後期高齢者の現在および今後の生活に対する思い

―Ｙ県Ａ町のひとり暮らし高齢者へのインタビューから―

小山尚美[1)]　流石ゆり子[1)]　河野由乃[1)]　村松照美[2)]　郷　洋子[2)]　林正健二[3)]
小野興子[4)]　横山貴美子[4)]　伊藤健次[4)]　城戸裕子[4)]　波木井　昇[5)]

要　旨

過疎農山村地域の独居後期高齢者の現在・今後の生活への思いを明らかにすることを目的にＡ町の６名に半構成的面接を行った。【猿や猪が農作物を喰い荒らして困る】【欲を言えばもう少し交通の便を良くして欲しい】と山間部特有の問題や【年々歳をとってこのまま元気でいられるかどうか先のことはわからず不安だ】【みんな歳をとり昔のようにいかなくなり悔しい】【災害や跡継ぎがないことが心配だ】等の加齢変化の実感と不安を抱えていた。これらに【みんなとの交流は楽しみだ】【みんなが支えてくれてるので安心して生活できる】と田舎ならではの良さが勝り【ここでの今の生活は幸せだ】【子供の所へ行くより住み慣れたここに最期までいたい】と自ら今の生活を選択し【今の生活を維持する為にいろんなことを心掛けている】と日々努力をしていた。鳥獣被害対策、交通サービスの充実、現存の住民支援ネットワークの活用、役割保持の支援の必要性が示唆された。

キーワード：過疎農山村地域　ひとり暮らし　後期高齢者　現在および今後の生活　思い

Ⅰ．はじめに

近年、人口の急速な高齢化により高齢者人口割合は年々増加しており、2015年の高齢化率は26％、なかでも75歳以上の後期高齢化率は12.5％と推計されている[1)]。また、わが国では、核家族化、少子化、女性の社会進出、未婚率や離婚率の上昇、および配偶者との死別後でも子どもと同居しない者の増加などにより、独居高齢者が増加しており、高齢者人口に占める独居高齢者の割合は、1980年には11.2％だったものが、1990年14.7％、2000年17.9％、2010年20.8％、2015年には21.2％となり、その10年後の2025年には22.5％のピークに達すると推計されている[2)]。高齢者の生活において心身機能上に大きな変化が生じるのは、80～83歳頃と言われており[3)]、後期高齢者は、その健康特性から、現在健康であっても些細なことが原因で要介護の状態に陥る可能性が高いと言える。独居高齢者が些細な体調の崩れにより支援が必要になった時、社会との交流がほとんどない場合そのサインを受け取ることが困難であり、急速に日常生活自立度が低下する可能性が指摘されており[4)]、後期高齢者の場合では、その健康特性から、さらにその危険性は高いと

(所　属)	(専攻分野)
1）山梨県立大学　看護学部	老年看護学
2）山梨県立大学　看護学部	地域看護学
3）山梨県立大学　看護学部	看護関連科学
4）山梨県立大学　人間福祉学部	福祉コミュニティ学科
5）山梨県立大学　国際政策学部	総合政策学科

考えられる。また、山間の過疎化が進行した地域では、道路の整備状況や公共交通機関の利便性、坂道など地形、近隣との距離などの条件の悪さから、人との交流が持ちにくい可能性も考えられ[4]、これらの地域のひとり暮らしの後期高齢者は、その生活の維持が脆弱化しやすいと言える。

過疎農山村地域のひとり暮らしの後期高齢者が、住み慣れたまちで最期まで住み続けるためには、どのような支援が必要なのかを検討することは、地域保健福祉活動の課題である。したがって、これらの高齢者の顕在・潜在的ニーズを把握することが必要だが、当事者である高齢者本人が、現在及び今後に対し、どのような思いを抱いて生活を送っているのかということに焦点をあてた研究は少ない。

Ⅱ．研究目的

本研究は、過疎農山村地域のひとり暮らしの後期高齢者の現在および今後の生活に対する思いを明らかにし、地域保健福祉活動への示唆を得る。

Ⅲ．研究方法

1．調査対象

本研究の対象地域であるＡ町は、人口1,452人（平成20年9月1日現在）であり、平成19年度の高齢者（65歳以上）人口割合は47.8%で、後期高齢者（75歳以上）人口割合は29.1%を占めている。また、独居高齢者の割合は32.2%である。町の96%は山地であり、集落は広大な町内に点在し、人口密度は、3.93人／km^2となっている。かつては、養蚕や林業、畑作中心の農業に加え、鉱山もあり、町民の生計の基盤となっていたが、これらは全て衰退し、若い人は働く場所を求めて町外に移住したため、高齢者の比率は年々増加し、今日に至っている。このため、一集落の全戸数が6戸、住民全員11人が高齢者という集落もこの町では珍しくはなく、農山村部における高齢化が進行した典型的な過疎の町と言える[5) 6)]。

調査対象は、Ａ町地域包括支援センターで把握している75歳以上のひとり暮らし高齢者で、かつ日常生活が自立し日常会話が可能な者6名とした。なお、対象者の選定にあたっては、Ａ町地域包括支援センターの保健師に研究対象となる候補者の選定を依頼し、本人の了解をもって最終的な対象者とした。

2．調査方法

1）データ収集の方法

調査者は共同研究者6名で、対象者6名に対し、各1回、1対1で、30～40分の半構成的面接を行った。調査に先立ち、調査者を対象とした面接技術や質的研究、インタビューガイドに関する研究会を2回（各60分）実施し、インタビュー方法の統一化を図った。内閣府による調査[7]では、高齢者は日常生活全般について満足している者が82.5%であるが、不安を感じている者は67.9%であり、肯定的・否定的思いが混在していることが報告されている。また、独居高齢者の社会生活維持のためには、対象のニーズにあった地域の支援が不可欠であることも報告されている[8]。したがって、インタビューでは、対象者の生活に対する肯定的・否定的の双方の思いを引き出し、地域保健福祉サービスに対する思いも引き出すことが必要と考え、インタビューガイドの項目は、現在の生活状況、生活の中で安心すること、生活の中で困っていること・不安なこと、必要な（あったらいいなと思う）サービス、市町村行政への要望の5項目について設定した。面接は、対象者の希望により、6名中2名は対象者の自宅で、4名は集落の集会所で実施した。なお、後者4名の居住する集落は、現在世帯数8軒ほどの限界集落であり、ここに長年住み続けている高齢者は皆“顔見知り”で、集会所を拠点として家族以上の付き合いをしている。対象者の基本属性は、対象者の了解を得たうえで、Ａ町地域包括支援センターの保健師より情報収集をおこない、インタビューは承諾を得てテープに録音し、対象者の表情や態度、研究者が感じ取ったこと

などを補記しながら逐語化した。調査期間は平成19年8～9月であった。

2）分析方法

逐語化したデータは対象者が語る非構造的な集まりにすぎない。過疎農山村地域のひとり暮らし高齢者の現在・今後の生活に対する思いを総体的に理解するためには、断片的に見える高齢者の思いを統合し、それらの思いの関係性を構造化することが必要となる。川喜田は、ＫＪ法における定性的なデータを思考レベルにまとめるステップを「データをして語らしめる」と表現している[9]。また、ＫＪ法は、生活をめぐる混乱を処理する研究に相応しい方法として考案され、個別的現象から次第に一般化秩序の発見に向かうと言われている[10]。本研究では、高齢者本人の発言が最も反映できる方法として、また、高齢者の思いを総体的に理解する分析方法としてKJ法を採択した。面接時に録音したテープから作成した逐語録を繰り返し読み、現在の生活および今後の生活に対する思いが表現されている部分を中心に抽出し、対象者のもとの発言の肌触りができるだけ伝わるような表現で一行見出しを作成した。その後、ラベル拡げ、ラベル集め、表札づくりを行った。さらに、最も抽象度の高い表札群を、その表札の内容が意味の上で最もわかりやすい相互関係の配置となるよう空間配置し、表札間の関連づけを行い、これをもとに図解化、文章化し、ストーリーラインとした。なお、一行見出し作成から文章化までのプロセスは、共同研究者間で意見が一致するまでディスカッションを繰り返し、分析を行った。

3）倫理的配慮

対象者を管轄しているＡ町地域包括支援センター長に調査の概要を文書および口頭で説明し、調査協力依頼を行った。承諾が得られた後、対象者の状況を熟知しているＡ町地域包括支援センター保健師に候補者の選定を依頼した。候補者の中から、研究協力への意思のある者に対し保健師が了解を得たうえで、研究者が直接、調査協力の依頼を文書および口頭で分かりやすく説明し、同意書の署名をもって最終的な調査対象者とした。面接中断や発言拒否の自由、データの研究以外の目的での使用禁止、個人情報への配慮、研究後の個人記録の破棄などについて説明を行い、協力に同意しなくても何の不利益も被らないことを伝えた、また、面接中は対象者の健康状態や疲労度に配慮した。

Ⅳ．結果

1．対象者の基本的属性

対象者は、全員が女性で、平均年齢は83.0歳（範囲：80歳～88歳）であった。また、6名ともに介護保険の要介護認定は受けていなかった。

2．ひとり暮らし高齢者の現在および今後の生活に対する思い

逐語録より、現在および今後の生活に対する思いの表現されている部分をＫＪ法により抽出した結果、148の一行見出しが作成され、それをもとに、ラベル広げ、ラベル集め、表札づくりの結果、59の小チーム、さらに抽象度を高めた22の中チーム、最後に10の大チームが編成された。以下、大チームの表札を【　】、中チームを〔　〕、小チームを〈　〉として示す。最終的には、【猿や猪が農作物を喰い荒らして困る】【欲を言えばもう少し交通の便を良くして欲しい】【年々歳をとってこのまま元気でいられるかどうか先のことはわからず不安だ】【みんな歳をとり昔のようにいかなくなり悔しい】【災害や跡継ぎがないことが心配だ】【みんなとの交流は楽しみだ】【みんなが支えてくれてるので安心して生活できる】【ここでの今の生活は幸せだ】【子供の所へ行くより住み慣れたここに最期までいたい】【今の生活を維持する為にいろんなことを心掛けている】の10の大チームが抽出された（表1）。

表1　各チームの表札と一行見出しの数

大チームの表札	中チームの表札	小チームの表札	一行見出しの数
猿や猪が農作物を喰い荒らして困る	猿や猪が農作物を喰い荒らして困る	猿や猪が農作物を喰い荒らして困る	3
欲を言えばもう少し交通の便を良くして欲しい	欲を言えばもう少し交通の便を良くして欲しい	欲を言えばもう少し交通の便を良くして欲しい	3
年々歳をとってこのまま元気でいられるかどうか先のことはわからず不安だ	年々歳をとってこのまま元気でいられるかどうか先のことはわからず不安だ	先のことがわからず不安だ	3
		急に倒れたら困る	3
		歳をとって身体がだんだん大変になって困る	4
		気持ちだけは安気で生活している	1
		今は幸せだと思うが、これで本当に安心だなあということは今のところない	1
みんな歳をとり昔のようにいかなくなり悔しい	人が減り年寄りばかりで昔のようにはいかず残念だ	若い人がいないから部落の行事は大変だ	4
		元気の間はお友達がいっぱいいたからお茶のみをして楽しかったが、今はそれができなくなって残念だ	1
		若い人がいればいいが、みんな年寄りばっかりだから大変だ	1
		習字や大正琴を一緒に習う仲間がいればいいと思う	1
	昔のように身体が思うようにならず悔しい	身体が○○で辛い	3
		身体が思うようにならず昔のように○○できず悔しい	2
災害や跡継ぎがないことが心配だ	災害や跡継ぎがないことが心配だ	災害が心配だ	2
		跡継ぎがないことが心配だ	2
みんなとの交流は楽しみだ	人と集まって交流するのが楽しみだ	部落の人たちとの集まりが楽しみだ	7
		ゲートボールで皆に会うのは楽しみだ	2
		デイサービスは楽しみだ	3
	子や孫との交流が楽しみだ	子供や孫に会うのが楽しみだ	7
		子供達に自分の作ったものをあげるのが楽しみだ	4
みんなが支えてくれてるので安心して生活できる	近所の支援があるから助かっている	この部落はみんなで助け合っていることが自慢だ	3
		近所の親戚がいるから助かっている	2
		近所の人が乗り合わせで買い物などに行ってくれて助かる	1
		私が黙っていても、周りの人が自分のことを気にしていてくれてありがたい	1
		近所の人は優しく、二つ返事で用を足してくれるので本当に助かっている	1
	子供の支援があるから安心だ	別居の子供の支援があるから安心	3
		別居の子供を頼りにしている	2
		子供が良くしてくれて幸せ	2
	今はサービスも充実し便利な世の中になってありがたい	町の行政サービスはありがたい	5
		町の送迎サービスは助かる	4
		便利な世の中になって助かっている	2
ここでの今の生活は幸せだ	健康で役割を持って気ままに暮らしているから幸せ	気ままに暮らしているから幸せ	3
		役割があることは活気の一つだ	4
		自分は健康だから幸せだ	3
		今の生活は最高に幸せだ	1
	自分は○○に誇りをもっている	昔の苦労があるから今がある	2
		○○は自分の自慢だ	4
		町内外から来る友人が多く忙しいがなんとかこなしていることが嬉しい	1
		姑と同じ歳まで生きることが親孝行と思い、頑張ってきた	1
		姑の介護を良くしてきたことをみんなに誉めてもらいたい	1
	百姓は生きがいだ	働くのが好きだ	3
		百姓は楽しみだ	5
	自分たちの年代が一番幸せだ	自分たちの年代が一番幸せだ	2
	自分なりの楽しみがある	自分なりの楽しみがある	2
子供の所へ行くより住み慣れたここに最期までいたい	子供の所へ行くより住み慣れたここに最期までいたい	住み慣れたここが一番良い	3
		最期までここにいたい	3
		子どもの所は便利だが何もすることがなくて困る	1
		子どもは来いと言ってくれるが自分が安気にここで暮らすのが一番幸せ	1
		子どもは良くしてくれるが、子どものところで生活するとお互いに気を遣うので、一人で家に居た方が気持ちが楽だ	1
		火事でも起こせばここには居られず、子供のところへ連れて行かれると思う	1
今の生活を維持する為にいろんなことを心掛けている	健康に気をつけている	牛乳やお酒を飲んでいるから元気でいられる	3
		ケガをしないように気をつけている	2
		頭と身体を使うのは健康によい	3
		身体と相談しながら無理をしないようにしている	6
		ここの地域はみんなで健康に気を付けている	1
	先のことは心配しすぎず明るくしている	先のことは心配しすぎず明るくしている	2
	できる限り自分でするようにしている	できる限り自分でするようにしている	4
	ここが嫌だなんて言えば、どこへ行っても住めない	ここが嫌だなんて言えば、どこへ行っても住めない	1
	お経を唱えてるとなんとなく自分の心が洗われる	お経を唱えてるとなんとなく自分の心が洗われる	1

V．考察

1．過疎農山村地域のひとり暮らしの後期高齢者の現在および今後の生活に対する思いのストーリーライン

過疎農山村地域のひとり暮らしの後期高齢者の現在および今後の生活に対する思いを総体的に理解するため、10の大チームの空間配置を行った（図1）。10の大チームを意味のうえで最もわかりやすい相互関係となるよう、山間部特有の問題への願い、加齢変化の実感と不安、田舎ならではの良さ、過疎農山村地域での生活の選択の4つの内容ごとに分類した。過疎農山村地域のひとり暮らしの後期高齢者は、【欲を言えばもう少し交通の便を良くして欲しい】【みんな歳をとり昔のようにいかなくなり悔しい】のように、山間部特有の問題や加齢変化の実感と不安を持ちつつも、【子供の所へ行くより住み慣れたここに最期までいたい】と自ら望んで今の生活を選択していた。これは、過疎農山村地域での生活に、〈部落の人たちとの集まりが楽しみだ〉〔近所の支援があるから助かっている〕〔百姓は生きがいだ〕のような田舎ならではの良さを感じる一方、山間部のような問題のない便利で安心な環境については〈子どもの所は便利だが何もすることがなくて困る〉〈子どもは来いと言ってくれるが自分が安気にここで暮らすのが一番幸せ〉と捉えているためと考えられた。したがって、田舎ならではの良さが、山間部特有の問題と加齢変化の実感と不安に勝り、過疎農山村地域での生活の選択へ向かうように配置した。以下に、文章化したストーリーラインを示す。

調査対象である過疎農山村地域のひとり暮らしの後期高齢者は、【猿や猪が農作物を喰い荒らして困る】【欲を言えばもう少し交通の便を良くして欲しい】などの山間部特有の問題への願いを抱き、【年々歳をとってこのまま元気でいられるかどうか先のことはわからず不安だ】【みんな歳をとり昔のようにいかなくなり悔しい】【災害や跡継ぎがないことが心配だ】といった加齢変化の実感と不安を抱えていた。しかし、【みんなとの交流は楽しみだ】【みんなが支えてくれてるので安心して生活できる】と田舎ならではの良さが山間部特有の問題と加齢変化の実感と不安に勝り、【ここでの今の生活は幸せだ】【子供の所へ行くより住み慣れたここに最期までいたい】と自ら過疎農山村地域での生活を選択し、【今の生活を維持する為にいろんなことを心掛けている】と日々努力をしていた。

2．現在及び今後の生活に対する4つの思い

1）山間部特有の問題への願い

過疎農山村地域のひとり暮らしの後期高齢者は、【猿や猪が農作物を喰い荒らして困る】【欲を言えばもう少し交通の便を良くして欲しい】のように、山間部特有の問題への願いを抱いていた。本結果では〔百姓は生きがいだ〕という中チームも存在しており、農業は単なる生活の

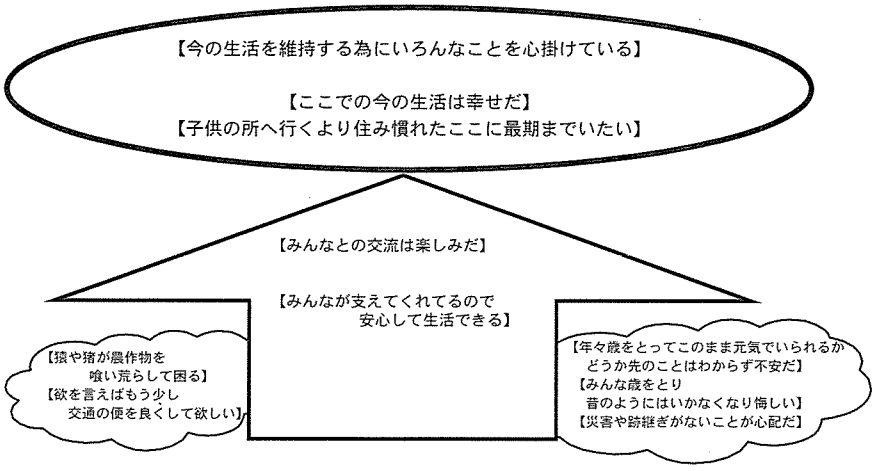

図1　過疎農山村地域のひとり暮らしの後期高齢者の現在及び今後の生活に対する思い

糧ではなく、作物を育て・収穫する喜びや、それを人に食べさせる喜びも含んでいることが窺え、農作物を喰い荒らされることは、食料の入手という面だけでなく、楽しみを奪われるという面からも問題と考えられる。A町では、20年ほど前から猿や猪の被害報告があり、電気柵を用いた対策も行っているが、被害は増加の一途をたどっており、H19年度の被害総額は177万5千円となっている[11]。このため、畑を縮小する住民もみられている。農村地域で暮らす高齢者を対象とした調査では、農業を続けられる自分を自覚することは自分への誇りとなることが報告されており[12]、山間地域に住む高齢者の普段の主な外出先は田畑であるとの報告[4]もある。このような地域で農業を続けることは、精神面の健康へ大きく影響するばかりでなく、外出の機会ともなっており、身体機能の維持のためにも重要と考えられる。

また、高齢者は交通サービスに関し、【欲を言えばもう少し交通の便を良くして欲しい】と語っていた。長年その地で暮らしている者は、昔ながらの近所付き合いの中で遠慮があり地域ケアシステムに対して「迷惑をかけたくない」と思う割合が高くなるという報告[13]がある。本調査でも、高齢者は自らの「交通の便を良くして欲しい」という要望の前には「欲を言えば」「もう少し」などの言葉が付いており、遠慮があることが窺える。その一方、〈町の送迎サービスは助かる〉などの小チームも見られ、地域で提供されているサービスへの感謝の気持ちも窺える。交通手段が選択できるという要因はひとり暮らし老年者の活動の拡大に影響を及ぼすと言われている[14]ため、高齢者が気兼ねなく自分の選択のもとで交通サービスを使えるようなシステムが必要となることが考えられる。

以上より、山間部特有の問題として、鳥獣被害への対策や、気兼ねなく利用できる交通サービスの充実を図っていくことが必要と考える。

2）加齢変化の実感と不安

高齢者は、【年々歳をとってこのまま元気でいられるかどうか先のことはわからず不安だ】【みんな歳をとり昔のようにいかなくなり悔しい】など、加齢変化を実感しながら、【災害や跡継ぎがないことが心配だ】と、現在及び今後の生活に対する不安を抱えながら生活していた。

高齢者の生活において心身機能上に大きな変化が生じるのは、80～83歳頃と言われており[2]、在宅で生活している後期高齢者は、前期高齢者と比較して身体的資源が乏しく、それによって精神的健康の低下が見られることも示されている[15]。本研究対象者の平均年齢が83.0歳であることからも、加齢変化の実感は避けられないものと考えられる。【年々歳をとってこのまま元気でいられるかどうか先のことはわからず不安だ】をみると、〈急に倒れたら困る〉〈歳をとって身体がだんだん大変になって困る〉などの小チームで表現されているように、高齢者が加齢変化を実感し、急病など不測の事態への恐れや今後も現在の生活が維持できるかという不安が存在することが窺える。

また、【みんな歳をとり昔のようにいかなくなり悔しい】は〔人が減り年寄りばかりで昔のようにはいかず残念だ〕〔昔のように身体が思うようにならず悔しい〕で形成されていた。〔人が減り年寄りばかりで昔のようにはいかず残念だ〕には、〈若い人がいないから部落の行事は大変だ〉〈習字や大正琴を一緒に習う仲間がいればいいと思う〉という過疎の村特有の結果が小チームとして含まれていた。若い世代が地域に残らない中で、村の行事を継承していくことは、高齢者にとって負担感の強い問題であり、また、趣味の仲間なども人口自体が少ない村では数に限度がある。さらに、〔昔のように身体が思うようにならず悔しい〕をみると、〈身体が○○で辛い〉〈身体が思うようにならず昔のように○○できず悔しい〉という小チームで形成されていた。高齢化率の高いこの町では、集落の住民の殆どが高齢者という状況もあり、自己の加齢変化の自覚だけでなく、近隣住民の加齢変化も目の当たりにしている。このような中

で、加齢変化により、以前はできていたことが、思うようにできなくなっている現実を、自分および地域全体のこととして捉え、悔しい思いが存在することが窺える。

【災害や跡継ぎがないことが心配だ】をみると、〈災害が心配だ〉〈跡継ぎがないことが心配だ〉などの心配事がある様子が窺えた。先述したとおり、高齢者は自己の加齢変化だけでなく地域全体の変化も実感しており、そのような中では〈災害が心配だ〉と考えるのも当然であろう。また、我が国では、戦前は家制度のもと、多くの場合長子が家を継承してきたが、戦後は民法上の家父長制度は廃止され、家族の形態も変容してきている[16]。しかし、後期高齢者にとっては戦前の家制度の意識もまだまだ存在しており、〈跡継ぎがないことが心配だ〉と考えることも理解できる。

このように、高齢者は、加齢変化を実感し、現在及び今後の生活に対し様々な不安を抱えながら生活していた。佐藤ら[17]は独居高齢者のストレス構成因子として「老いへの不安」「ひとりで生きていく事への不安」「身体的不調」などを挙げているが、これらは身体的にも精神的にも健康を保ち、趣味などの生きがいをもつことによって軽減できることを示唆している。高齢者の不安を軽減するためには、心身の健康及び趣味や生きがいの保持への支援が必要であろう。

3）田舎ならではの良さ

高齢者は、【みんなとの交流は楽しみだ】【みんなが支えてくれてるので安心して生活できる】と田舎ならではの良さを自覚していた。【みんなとの交流は楽しみだ】は〔人と集まって交流するのが楽しみだ〕と〔子や孫との交流が楽しみだ〕で形成されていた。〔人と集まって交流するのが楽しみだ〕をみると、〈部落の人たちとの集まりが楽しみだ〉〈ゲートボールで皆に会うのは楽しみだ〉などの小チームから形成されており、近隣と交流する機会が日常生活の中に組み込まれている事が窺える。岡本[18]は中年期の地域との関わりが老年期の社会参加に影響することを明らかにしているが、本調査対象であるＡ町では、老年期になってからの転入は殆どなく、狭いコミュニティの中では近隣住民と交流する機会が若いうちから自然とできているものと考えられる。また、〔子や孫との交流が楽しみだ〕は、〈子供や孫に会うのが楽しみだ〉や〈子供達に自分の作ったものをあげるのが楽しみだ〉という小チームが含まれ、ひとり暮らしであっても家族との交流があり、それが楽しみになっていた。仲間との結びつきは、高齢者が誇りをもち続けるための心の拠りどころとなる[12]と言われている。ひとり暮らしであっても近隣の仲間との交流があり、家族とは別居であっても交流があることは、高齢者にとっては誇りとなり、心身共に健康に生活を送る要因の一つとなっていると考えられる。

また、【みんなが支えてくれてるので安心して生活できる】は〔近所の支援があるから助かっている〕〔子供の支援があるから安心だ〕〔今はサービスも充実し便利な世の中になってありがたい〕で形成されていた。〔近所の支援があるから助かっている〕を見ると、〈この部落はみんなで助け合っていることが自慢だ〉〈近所の親戚がいるから助かっている〉〈私が黙っていても、周りの人が自分のことを気にしていてくれてありがたい〉などの小チームが含まれており、近隣がひとり暮らしの高齢者の存在を気に掛けて支援していることが窺えた。野口[19]は、独居高齢者は他の世帯構成の高齢者と比較し、友人・近隣・親戚など、小さな規模のネットワークに関して、より大きな頻度の交流があることを明らかにし、同居家族がいない場合には、必然的にサポートを外部に求めざるをえなくなると述べている。本研究でも、高齢者自身が、ひとり暮らしである自分が近隣の支援によって生活していることを認識し、周囲へ感謝している様子が窺えた。また、先述した通り、この地域では老年期の転入が少なく、近隣とのネットワークは若い頃から形成されている。このこと

も、近隣からのサポートを積極的に受け入れて生活調整を行える要因と考えられる。〔子供の支援があるから安心だ〕をみると、〈別居の子供の支援があるから安心〉〈別居の子供を頼りにしている〉などで形成されており、ひとり暮らしであっても、別居子の支援体制が整っていることが窺えた。子供に依存できる条件のあることはひとり暮らしを支える大きな要因であり[20]、本結果からも、別居子のサポートが高齢者の生活を支える大きな要因となっていることが考えられた。また、〔今はサービスも充実し便利な世の中になってありがたい〕には、〈町の行政サービスはありがたい〉〈町の送迎サービスは助かる〉などの小チームが含まれており、行政が提供する送迎サービスが、高齢者の生活にとって大きな役割を果たしていることが窺えた。栗原ら[21]は、徒歩以外の外出手段の確保が独居高齢者のとじこもり予防に有効な方策の一つであると述べており、本調査対象のような過疎の町では、民間サービスの参入は採算の面からも難しく、行政の果たすべき役割は大きい。今後も行政が住民のニードに即したサービスを提供していくことが大切である。また、〈便利な世の中になって助かっている〉のように、食物を保存する冷蔵庫や解凍できる電子レンジなどの家電製品や、電話などの機器も、ひとり暮らしの高齢者を支える役割を大きく担っていることも窺えた。高齢者は新たな物を覚えるのが苦手であっても、それまでの人生経験により、物事への理解力や洞察力が深まっている[22]とも言われているため、生活に役立つような製品や機器も取り入れていくことも、ひとり暮らしの高齢者を支える援助として有効と思われる。

以上より、現存の住民支援ネットワークの活用とともに、支援者へのサポートの充実、民間参入の難しい分野での行政サービスの重要性が示唆された。

4）過疎農山村地域での生活の選択

高齢者は、【ここでの今の生活は幸せだ】【子供の所へ行くより住み慣れたここに最期までいたい】と農山村地域での生活を選択し、【今の生活を維持する為にいろんなことを心掛けている】と日々努力をしていた。

本結果では、【ここでの今の生活は幸せだ】は〔健康で役割を持って気ままに暮らしているから幸せ〕〔自分は○○に誇りをもっている〕〔百姓は生きがいだ〕〔自分たちの年代が一番幸せだ〕〔自分なりの楽しみがある〕で形成されていた。〔健康で役割を持って気ままに暮らしているから幸せ〕をみると、〈役割があることは活気の一つだ〉〈自分は健康だから幸せだ〉のような小チームで形成されていた。このことから、高齢者は、自分が健康で暮らしているからこそ、役割や楽しみをもって生き生きと暮らしていることを自覚している様子が窺える。阿部ら[23]は独居高齢者では役割意識の有無が主観的幸福感に影響を及ぼすと述べているが、本研究対象者は、まさに自分自身の役割を自覚し、役割の発揮できる「ここでの今の生活」を「幸せだ」と表現していた。役割の自覚が今後も続けられるように支援していくことが必要である。

また、【子供の所へ行くより住み慣れたここに最期までいたい】をみると、〈住み慣れたここが一番良い〉〈子どもは来いと言ってくれるが自分が安気にここで暮らすのが一番幸せ〉という小チームで表現されるように、自ら現在の生活を選択していることがわかる。虚弱高齢者の在宅生活継続に対する意思は、前向きな気持ちとひとり暮らしを受け入れる気持ちから形成されるとの報告[24]があるが、本結果では、「受け入れる」という表現は見られなかった。前述したとおり、本研究の対象者は、健康で役割をもっており、〈子どもの所は便利だが何もすることがなくて困る〉のように、A町で暮らすことで自分自身が役割を発揮しながら生活していることも自覚している。この自覚が、「ここ」でのひとり暮らしを「一番良い」としている一因と考えられる。また、内閣府の調査[25]では、独居高齢者がこの先住みたい場所は「自宅」が61.2%であり、そのうち借家の者は35.2%、

持家の者は69.9%であったと報告している。この町では、老年期になってからの転入は殆どなく、住民は昔から、A町に居を構え、殆どの住民が持家である。また、高齢者が言う「住み慣れた家」の意味するところは、物体としての「家」をさすのではなく、かつて自分が時を過ごした人間関係を含めた環境のことであるとも言われている[26]。〈住み慣れたここが一番良い〉との表現には、単に生活が身体に慣れているという意味合いだけでなく、これまでの家族や近隣住民との思い出も含まれるものと考えられる。高齢者の生活を支援する者は、このようなことを念頭に、高齢者の思いを尊重しながら関わることが重要と考える。

また、【今の生活を維持する為にいろんなことを心掛けている】は、〔健康に気をつけている〕〔先のことは心配しすぎず明るくしている〕〔できる限り自分でするようにしている〕〔ここが嫌だなんて言えば、どこへ行っても住めない〕〔お経を唱えてるとなんとなく自分の心が洗われる〕で形成されていた。〔健康に気をつけている〕を見ると、〈牛乳やお酒を飲んでいるから元気でいられる〉〈ケガをしないように気をつけている〉〈頭と身体を使うのは健康によい〉などの小チームが含まれていた。独居高齢者は健康を考え、適切な運動や食生活に気遣い、規則正しい生活に努めているとの報告[13) 27)]もあり、本研究も同様の結果であった。また、〔先のことは心配しすぎず明るくしている〕〔できる限り自分でするようにしている〕〔ここが嫌だなんて言えば、どこへ行っても住めない〕〔お経を唱えてるとなんとなく自分の心が洗われる〕の中チームで表現されるように、高齢者は、本人なりに生活を前向きに捉えている様子も窺えた。独居の後期高齢者の7割が、趣味を持つことや前向きに考えるよう気をつけているとの報告[27]もあり、本研究でも同様の結果が見られた。ひとり暮らしの高齢者は、現在及び今後の生活を維持するために、本人なりに心身の健康を維持するように努力をしていることが明らかになった。このような高齢者なりの努力が継続できるような支援の必要性が示唆された。

以上より、高齢者が役割を自覚しながら、現在の「住み慣れたここでの生活」を継続できるよう、本人なりの努力をサポートしていくような関わりの必要性が示唆された。

Ⅵ. 研究の限界と今後の課題

本研究は、対象者が一地域にとどまっており、対象もすべて女性であったことから、結果を一般化するには限界がある。今後はさらに対象地域を拡大し、一般化に向けて検討を重ねる必要がある。また、今回は高齢者の思いを総体的に理解するための方法としてKJ法を用いたが、対象者それぞれの生活背景によって、生じる思いが異なることが予想される。今後は、ひとり一人の背景を踏まえた事例研究としての分析も必要である。

Ⅶ. 結論

過疎農山村地域のひとり暮らしの後期高齢者の現在および今後の生活に対する思いを明らかにすることを目的とし、6名の後期高齢者に半構成的面接を行った結果、以下の点が明らかになった。

1. 【猿や猪が農作物を喰い荒らして困る】【欲を言えばもう少し交通の便を良くして欲しい】など山間部特有の問題への願いを抱いて生活していた。
2. 【年々歳をとってこのまま元気でいられるかどうか先のことはわからず不安だ】【みんな歳をとり昔のようにいかなくなり悔しい】【災害や跡継ぎがないことが心配だ】といった加齢変化の実感と不安を抱えていた。
3. 【みんなとの交流は楽しみだ】【みんなが支えてくれてるので安心して生活できる】と田舎ならではの良さを自覚していた。
4. 田舎ならではの良さが、山間部特有の問題と加齢変化の実感と不安に勝り、【ここでの今の生活は幸せだ】【子供の所へ行くより住み慣れたここに最期までいたい】と過疎農山村地域での生活の選択し、【今の生活を維持

する為にいろんなことを心掛けている】と日々努力をしていた。

以上より、過疎農山村地域のひとり暮らしの後期高齢者が、現在の生活を維持する為には、鳥獣被害への対策や交通サービスの充実、現存の住民支援ネットワークの活用と支援者へのサポート、心身の健康及び生きがいや役割の保持へのサポートが必要であることが示唆された。

謝辞

本研究実施にあたり、多大なご協力をいただきましたA町高齢者の皆様、ならびに地域包括支援センタースタッフの皆様に心より感謝申し上げます。

尚、本研究は平成19年度山梨県立大学地域研究交流センター・プロジェクト研究の助成を受けて実施した研究の一部である。

引用・参考文献

1) 高齢者介護研究会:2015年の高齢者介護―高齢者の尊厳を支えるケアの確立に向けて―，80，法研，2003.
2) 内閣府：平成18年度版高齢者白書，20，2006.
3) 冷水豊：老いと社会，88-90，有斐閣アルマ，2002.
4) 郷洋子，山岸春江：山間地域に居住する独居高齢者の人との交流・外出状況の実態，山梨県立看護大学紀要，Vol.7，9-18，2005.
5) 早川町役場ホームページ（2008-9-10閲覧）：トップページ ひとのうごき（平成20年9月1日現在）より，http://www.town.hayakawa.yamanashi.jp/
6) 流石ゆり子，小野興子ほか：少子高齢化時代の地域ネットワーク 多参画社会の構築と人材養成（Ⅲ）―ひとり暮らし・夫婦世帯の高齢者に焦点をあてて―，8，山梨県立大学地域研究交流センター，2007.
7) 内閣府共生社会政策統括官　高齢化対策（2008-11-21閲覧）：平成16年度高齢者の日常生活に関する意識調査結果，http://www8.cao.go.jp/kourei/ishiki/h16_nitizyou/2.pdf
8) 柳川育子：判断力が衰え，要介護状態にある独居高齢者の地域生活支援―成年後見制度の「身上監護」を中心に―，京都市立看護探知大学紀要，第31号，61-67，2006.
9) 川喜田二郎：KJ法―渾沌をして語らしめる，75-76，中央公論社，1986.
10) 舟島なをみ：質的研究への挑戦（第1版），84-97，医学書院，1999.
11) 早川町役場ホームページ（2008-9-10閲覧）：早川町鳥獣被害防止計画，http://www.town.hayakawa.yamanashi.jp/chojukeikaku/chojukeikaku.pdf
12) 大森純子：高齢者にとっての健康：『誇りをもち続けられること』農村地域におけるエスノグラフィーから，日本看護科学会誌，24巻3号，12-20.2004.
13) 高橋和子，太田喜久子：都市部と農村部における高齢者の地域ケアシステムに関するニーズとその傾向，老年看護学，Vol.6No.1，50-57，2001.
14) 渡邊裕子，嶋田えみ子ほか：老年者のひとり暮らし継続の要因 その2―市内中心部と郊外地区の比較―，山梨県立看護大学短期大学部紀要，第4巻第1号，15-23，1999.
15) 杉澤秀博，柴田博：前期および後期高齢者における身体的・心理的・社会的資源と精神健康との関連，日本公衆衛生雑誌，第47巻第7号，589-601，2000.
16) 三浦文夫：図説高齢者白書2004年度版，44-51，全国社会福祉協議会，2004.
17) 佐藤至英，戸澤希美：独居高齢者のストレスとQOLとの関係，北方圏生活福祉研究所年報，第9巻，39-45，2003.
18) 岡本秀明，岡田進一ほか：大都市居住高齢者の社会活動に関連する要因　身体、心理、社会・環境的要因から，日本公衆衛生学会誌，第53巻第7号，168-179，2006.
19) 野口裕二：高齢者のソーシャルサポートネットワークとシーシャルサポート―友人・近隣・親戚関係の世帯類型別分析―，老年社会科学，13号，89-105，1991.
20) 渡邊裕子，内藤理英ほか：手段的ADLの視点からみた老年者のひとり暮らしの継続要因，山梨県立看護大学短期大学部紀要，第3巻第1号，27-35，1998.
21) 栗原律子，桂敏樹：ひとり暮らし高齢者の「閉じこもり」予防および社会活動への参加に関連する要因，日本農村医学会雑誌，52巻1号，65-79，2003.
22) 鎌田ケイ子：高齢者ケア論（改訂版），70-71，高齢者ケア出版，2006.
23) 阿部美里，川村瑞穂ほか：地域で生活する高齢者

の担う役割と主観的幸福感について，日本看護学会論文集 老年看護，38号，123-125，2008.
24) 田中昭子，小西美智子：ひとり暮らし虚弱高齢者の在宅生活継続の対処方法，老年看護学，Vol.8No.2，63-72，2004.
25) 内閣府共生社会政策統括官　高齢化対策（2008-8-27閲覧）：平成17年度世帯類型に応じた高齢者の生活実態等に関する意識調査，http://www8.cao.go.jp/kourei/ishiki/h17_kenkyu/pdf/k-2-6.pdf
26) 苛原実：療養環境のソフトとハード，月刊総合ケア，13（3），19-21，2003.
27) 本田亜起子，斉藤恵美子ほか：一人暮らし高齢者の特性―年齢および一人暮らしの理由による比較から―，日本地域看護学会誌，Vol.5No.2，85-89，2003.

The Thoughts toward Present and Future Life

— The Thoughts of Person Aged 75 or Over Living Alone in The Depopulation Farming and Mountain District —

KOYAMA Takami, SASUGA Yuriko, KOHNO Yoshino, MURAMATSU Terumi, GO Yoko, RINSHO Kenji, ONO Kyoko, YOKOYAMA Kimiko, ITO Kenji, KIDO Yuko, HAKII Noboru

Key words : The Depopulation Farming and Mountain District　Living Alone　Person Aged 75 or Over　Present and Future Life　The Thoughts